

TTC 定例山行実施記録表

2011年8月2日 報告者:坂本 達治

山行名	後立山連峰リレー登山【Aコース】 全山縦走コース [長野県、富山県] 白馬岳:2932.2m、唐松岳:2696.4m、五龍岳:2814.1m、 鹿島槍ヶ岳:2889.1m、爺ヶ岳:2669.8m、針ノ木岳:2820.6m
実施日	2011年7月23日[土]~28日[木] 5泊6日 往路:ハイエース、復路:公共交通 利用
天候/参加人員	天候:実行欄に記載 レベル:★★★★ 参加人員(申込:5名、参加:4名)
パーティスタッフ	CL/計画: SL/会計: 救護: 写真: 氏名削除
参加メンバー	氏名削除 [男性:3名、女性:1名]
費用(一人当たり) ¥62,500/人 TTCカンパ金 ¥510	①ハイエースレンタル料: ¥25,000、ドライバー謝礼: ¥27,000(=基本: ¥18,000+早朝加算: ¥7,000+距離加算: ¥2,000)、燃料代: ¥14,850(=@135*550km/5)、高速道路代: ¥7,350(=往路: ¥2,450+復路: ¥4,900) 合計: ¥74,200 ⇒AおよびCコース参加者合計10名で案分 ¥7,420/人 ②山小屋利用料: ¥45,350(=白馬山荘: ¥9,000+唐松岳頂上山荘: ¥9,000+キレット小屋: ¥9,350+新越山荘: ¥9,000+針ノ木小屋: ¥9,000) ③タクシー代: ¥6,600(=扇沢~大町温泉郷: ¥4,100+大町温泉郷~信濃大町駅: ¥2,500) ⇒一人当たり ¥2,200/人 ④薬師の湯 入湯料: ¥500/人(クーポン利用) ⑤通信費: ¥200/人 ⑥復路交通費: ¥6,660/人(信濃大町駅~新宿駅:特急・自由席料金) →新宿駅以降は各自で支払い ①~⑥合計: ¥62,330/人 TTCカンパ金: ¥170/人 総計: ¥62,500/人

歩行・行動時間	日程		歩行時間	休憩時間	行動時間	備考
	計画	実行				
7/23[土]	計画		6:20	2:10	8:30	
	実行		6:00	2:30	8:30	
7/24[日]	計画		8:00	2:00	10:00	
	実行		7:59	2:26	10:25	
7/25[月]	計画		7:45	2:00	9:45	
	実行		7:58	1:44	9:42	
7/26[火]	計画		9:10	2:20	11:30	
	実行		8:53	2:42	11:35	
7/27[水]	計画		7:25	1:50	9:15	W.Eさんの靴底が剥がれ、補修のためロスタイム発生
	実行		7:27	2:25	9:52	
7/28[木]	計画		3:10	0:45	3:55	
	実行		3:07	0:40	3:47	

実行コースタイム記録

7月23日[土] 天候:曇時々晴

[市内各所ピックアップ]

[アヤシン装着]

本厚木——相模湖IC——談合坂SA——梓川SA——猿倉——白馬登山口——白馬尻小屋——大雪渓取付き——
2:30 3:30 3:38-50 5:25-35 6:58-7:20 8:00-07 8:30-52 9:12-20

(休憩5) (休憩5) [昼食] (休憩15) 【Bチームと合流】

——大雪渓終端——葱平(岩室跡)——村宮頂上小屋——白馬山荘——白馬岳山頂——白馬山荘
10:55-11:05 11:30-12:00 14:14-25 14:45-15:10 15:27-39 15:50

7月24日[日] 天候:曇時々晴 (休憩7)

[軽食]

白馬山荘——丸山山頂——白馬槍ヶ岳手前コル——白馬槍ヶ岳——天狗山荘——天狗の頭——
4:00起床-5:30出発 5:48 7:00-28 8:10-20 9:14-30 9:57-10:03

[昼食]

——天狗の大下り取付き——不帰嶮手前のコル——II峰の頭——II峰北峰——II峰南峰——
10:35-45 11:36-12:05 12:35-42 13:50-14:01 14:17

(休憩7) 【Dチームと合流】

——III峰——唐松岳——唐松岳頂上山荘
15:20-35 15:55

7月25日[月] 天候:晴のち曇一時小雨

	(休憩17)	(休憩7)【Eチームと合流】	[昼食I]	[昼食II]	
唐松岳頂上山荘	五龍山荘	五龍岳	五龍G4	赤坂刃り	北尾根ノ頭
4:00 起床-5:38 出発	8:25-38	10:03-30	11:23-35	12:40-56	13:14-18
—					
口ノ沢のコル	キレット小屋				
13:42-50	15:20				

7月26日[火] 天候:雨のち曇

	(休憩10)				
キレット小屋	北峰分岐	鹿島槍ヶ岳北峰	北峰分岐	鹿島槍ヶ岳南峰	布引山
3:30 起床-4:30 出発	6:31-37	6:46-52	6:59-7:08	7:47-8:06	8:46-56
—					
	(休憩20)	[昼食] (休憩9)			
冷池山荘	赤岩尾根分岐	爺ヶ岳南峰分岐	爺ヶ岳南峰	種池山荘	小ピーク
9:50-10:17	10:34	12:09	12:12-22	12:58-13:26	14:44-54
—					
岩小屋沢岳	新越山荘				
15:20-27	16:05				

7月27日[水] 天候:雨のち曇

	(休憩・補修31)	(補修7)	[昼食]		
新越山荘	鳴沢岳	赤沢岳	スバリ岳	針ノ木岳	針ノ木小屋
4:00 起床-5:38 出発	6:32-41	7:37-47	10:22-35	11:36-50	12:35-13:13
(休憩7)					
—					
針ノ木小屋					
15:30					

7月28日[木] 天候:雨

針ノ木小屋	針ノ木大雪渓開始点	針ノ木大雪渓終点	大沢小屋	扇沢登山口
5:40 起床-7:05 出発	7:55-8:05	8:29-36	9:18-38	10:28-31
—				
[反省会]				
扇沢	大町温泉郷 薬師の湯	信濃大町	新宿	本厚木
10:52-11:30	11:50-12:55	13:10-15:05	17:36-18:50	19:42

コースの概要、特記事項、反省事項等

7月23日[土] 午前2:30定刻に本厚木を出発。ハイエースはAおよびCコースのメンバー10名が利用しており、市内各所でピックアップして一路、猿倉に向かう。本日の白馬大雪渓(標高差:1627m)の登りを考えると、できるだけ眠っておいた方がよいのだが、これから始まる15周年記念山行への期待で胸が膨らみ、ほとんどの方が眠れない様子であった。

猿倉は多くの登山客でにぎわっていた。事前に準備しておいた登山届を提出しようとポストを探していたら、猿倉荘の前に何名かのスタッフが出ていて登山届を受け、内容をチェックしており、提出すると「ロングコースですね。装備も万全のようです。頑張ってください！」と激励を受けた。さすがに人気スポットは対応が違っていると感心させられた。

本日の天気予報は“曇時々晴”であり、ピーカンというわけにはいかない。大雪渓に取付くと頂上は霧の中。しかしながら、暫く進んで振り返ると下界が透き通るように見渡せる。更に進むと上空に青空が見え始めてきた。暑くもなく寒くもなく、絶妙の気温で、先頭をリードするS.Kさんは鼻歌交じりで絶好調の様子である。それにしても大雪渓上は石がゴロゴロしている。大きいものでは1.5mほどもあろうかという岩もある。こんなの直撃されたら逃げようもないし、一巻の終わりであろう。今年は雪の量が少な目のようで、葱平取付き付近のルートに秋ルートに変更するとの事前情報をいただいていたが、誘導(マーキング)に従って進めば全く問題ない。最後の急坂を登って村営頂上宿舎で一休みすると、白馬山荘までは20分ほどである。先着のBチームが出迎えてくれ、早速、タスキと横断幕を取出してA,B,Cコースのメンバー全員(16名)で写真に収まった。明日(7/24)の不帰嶮越えを考慮すると本日中に白馬岳に登っておかなければならない。山頂では初めてブロッケン現象を体験でき、また、雷鳥が出迎えてくれたりして、気分は益々高揚してくる。白馬山荘に戻って生ビールで健闘を讃えあっていると、明日からの行程を後押しするように真っ赤な夕日が微笑みかけてくれている。星空のスペシャリストであるI.Tさんのロマンティックな講義を画策したが、そこまでの好天には恵まれず、残念ながらお流れとなった。次の機会に期待したい

7月24日[日] 明け方に目を覚ますと頭の芯が痛い。高度3000mに近い白馬岳における高山病の兆候かもしれない。朝食の時に確認してみると何名かの方が同様に頭痛を訴えられており、特にS.Yさんはやや重症で、朝食を完全

に抜かれてしまわれた。私も含めた他の方たちは朝食までには回復し、S.Y さんも出発時間までには何とか元気になられたようで、一安心であった。

本日も A.C チーム合同の行動である。杓子岳は、本日のハイライトである不帰嶮に向けて体力温存のため巻き道で進む案と頂上をきちんと踏んでくる案の二択としたが、S.K シさん、T.S さんおよび I.T さんの3名が元気に杓子岳を目指すことになった。他の7名は合流点で約30分の待機となったが、この頃には体調不良であった S.Y さんもすっかり回復され、美味しい Coffee を準備して全員に振舞っていただいた。

白馬槍ヶ岳を経て天狗山荘に下る手前に比較的大きな雪渓があったが、いわゆる腐れ雪であり、1歩々々確実に踏みしめていけばアイゼンなしで問題ない。天狗山荘は全面黒塗りの洒落た佇まいの村営の山小屋である。ここで、この後登場する本日のというよりは本山行を通して最大のハイライトといえる“天狗の大下り”および“不帰嶮”に備えて、腹ごしらえをしてゆっくりと休息を取った。

天狗の頭を経ていよいよ天狗の大下りに取り掛かる。300mほどを一気に下ることになるが、「下りこそ3点確保が重要」と改めて言い聞かせながら慎重に歩を進めていく。相変わらず S.K シさんは軽口を連発しながらヒョイヒョイと下っており、緊張の中にも笑いの絶えない楽しい下りであった。50分ほど下ると不帰嶮手前のコルに到着。眼前にそそり立つ壁を見上げると、「こんなところを本当に登っていけるのか？」と不安になる。メンバーの顔を見渡すと多くの方が作り笑いによって緊張を隠しているようにも見える。30分ほどゆっくり休憩を取って、いよいよ不帰嶮に取り付く。歩を進めていくと想像していたよりはルートが分かりやすく、先導する S.K 義さんの的確なリードに従って、一峰の頭、Ⅱ峰北峰、Ⅱ峰南峰、Ⅲ峰と確実に進んでいき、2時間半ほどでこれらの難所をクリアすることができた。昨年チャレンジした槍ヶ岳～穂高岳の間にある大キレットの方が難易度ランクは上のような気がするが、それでも中々のものであった。

Ⅲ峰手前で休憩を取って、本日最後のピーク唐松岳に向かう。これまでの緊張感も手伝ってか足取りも重く、疲労が蓄積しているのが分かる。霧が発生したりして見通しが悪い時間帯もあったが、この頃になるとかなり透き通ってきて、これまで歩いてきた切り立った岩山を一望することができ、「こんなところを登ってきたんだ！」とお互いに健闘を讃え合っていると、前方から何だかキャーキャーと黄色い声が聞こえてきた。何かと見上げると、唐松岳頂上に待機して出迎えてくれているDチームの方々が声の限りの声援を送って下さっているのだった。これまでの疲れが一気に吹き飛んで足が軽くなった。初めてDチームの方々を見定めてから唐松岳頂上に到達するまで、恐らく15～20分位は掛かったと思うが、その間ずっと声援を送り続けていただき、これぞリレー登山の醍醐味と感じずにはいられず、思わず胸が熱くなってしまった。Dチーム CL の S.Y さんにタスキをリレーし横断幕を取出して全員で写真に収まって、感激的な再会のセレモニーはフィナーレと思いきや、唐松岳頂上山荘に到着すると Welcome coffee が待っていた。S.Y さんに淹れていただいたコーヒーと奥様の S.K さん手づくりのクッキーの美味しかったこと！“いつもの山仲間がいくつかのチームを作って計画的にリレーでつないでいく”と言ってしまえばそれまでだが、初めての経験に、「リレー登山っていいな～！」と感じずにはいられなかった。この日の夜はこのような心地よさもあってか、全5泊の中で最もよく眠ることができ、朝まで暴睡であった。

7月25日[月] 3日目は五龍岳を越えてキレット小屋までの行程である。厚木を出るときから一緒であったCチームはここから八方尾根を下ることになり、また、Dチームは五龍岳までの行程は一緒であるが五龍小屋泊まりのため時間的余裕が充分にあることから出発時間が異なり、ここでお別れとなる。5時半過ぎに準備を整えて出発したが、C,Dチームの方々にお見送りいただいた。山荘を出発して小高い丘を越えて見えなくなるまで、「頑張れ!」の声援と共にいつまでも手を振っていただいた。映画のシェーンの終幕で発せられた「Come back!」の声はなかったが…。

昨晚の十分な睡眠のお蔭で体調は万全で、この日は足がかなり軽く感じられる。休憩を挟みながら五龍山荘までは3時間弱の行程であったが、余裕で到着することができた。山荘の前で休んでいると、ベンチの周りで遠見尾根を見下ろしながら何人かの登山客が騒いでいる。尾根をしばらく下ったところでどこかのパーティーが30～40人位であろうか集まって何かをしており、先程から飛来していたヘリコプターが上空を行き来している。どうやら女性が滑落したとのことで、ヘリコプターに吊り上げられて救助されたとのことであった。人ごとと笑うことはできない。我々ももう一度、気持ちを引き締め直した。

ここまできると五龍岳までは1時間半ほどである。黙々と歩を進めて、頂上まで20分ほどの所まで来たところで上空から聞きなれた M.Y さんの声が聞こえてきた。更に歩を進めて見上げるとEチームの方々が手を振ってくれている。山荘を6時半ごろ出発して、もう2時間以上も我々の到着を待ってくれていたとのことである。山頂付近は風も穏やかでそれほど寒くなかったのは幸いであらうと思うが、それにしても2時間も待っていただいたとは、感謝の念に耐えない。早速、タスキ受け渡しのセレモニーと、例によって横断幕を取出して記念写真に収まると、Eチームの方々はさすがにしびれを切らしたのか、早々に出立していった。我々は早目に1回目の昼食をとり、五龍の頂からの景色を十分に堪能し20分ほどしてから出立した。それでも1時間もたたないうちに先行するEチームに追いついた。五龍の下りもG5、G7のポイントがある岩場のアップダウンがつづき、メンバー数の多いEチーム(7名)はロスタイムが多く発生するため致し方ない。このような場所で追い越すことは得策ではなく、また、先行するチームをあおって焦らすようなことにな

らないように、ゆっくり休みながら進んでいった。12:30 頃に雨に降られ、3日間で始めてレインウェアを着用することになった。雨脚はそれほど強くなく、しばらくすると上着を、また、更に進んでズボンを脱ぐことができ、北尾根ノ頭、口ノ沢のCOLを經由して、ほぼ定刻にキレット小屋に到着したが、到着すると直ぐに整理体操をする間もなく、雨がザーッと降り出した。どなたの日頃の行ないが良いのか分からないが、非常に幸運であった。小屋には生ビールは置いてなく、缶ビールで乾杯をし、WEさんの声掛けでAおよびEチームの皆が自炊部屋に集まって楽しい談笑がつづいた。

7月26日[火] 4日目は、八峰キレットを越えて鹿島槍ヶ岳を目指していきなり標高差450mを登る行程である。残念ながら雨が降っており、レインウェアやスパッツを着けてのスタートとなる。濡れた岩は滑りやすくなっている可能性が高く、注意しなければならない。新越山荘までの6日間の中で最も長いロングコースとなることから、日の出前ではあるが空が白み始めた 4:30 に計画通りの出発となった。自らの出発時間までにはタプリー余裕のあるEチームの方々が起き出してきて、玄関先までお見送りしていただいた。昨日まで同行していた S.K シさんはEチームに合流するため、ここからはAチームは3名での行軍となる。

「不帰嶮を越えてきたことからすると八峰キレットはそれほどでもない」とのことであったが、これはこれで違った趣があり、十分に楽しむことができた。2時間弱で鹿島槍ヶ岳北峰の分岐に到着後、更に10分ほどで北峰に登る。雨はやんだもののパツとしない天候は相変わらずだったが、北峰山頂では視界が開け、パノラマビューを堪能でき、これから行く爺ヶ岳や針ノ木岳を見通すことができたのは幸いであった。これに対し南峰ではガスに覆われ、ほとんど視界がきかず、記念撮影をそこそこ下山することとなった。

ここまでくると長い道のりは残っているものの、手入れの行き届いた登山道をルンルン気分で楽しく歩くのみである。布引山を經由して冷池山荘に到着すると、当初、本日の宿泊地として予定していた種池山荘の200名の予約がキャンセルとなり宿泊可能との情報を得たが、誰一人として種池に変更しようという意見は出なかった。計画通り新越山荘まで頑張って、残りの2日間の日程に余裕を持たせ、特に下山後の反省会(=祝杯)に十分な時間を確保しようとの魂胆である。こういう時にお酒を飲めるメンバーだけの構成というのはまともが良いものである。冷池山荘で自らのご褒美に醤油ラーメン(¥800)をいただくと思いきや益々元気が出てきて、爺ヶ岳(中央峰はガスに覆われていたため巻き道を進み、南峰は頂上を經由したが、やはり大した視界を得ることはできなかった)を經由して種池山荘までの3時間足らずの道のりはいろいろな会話をしながらのお散歩気分の縦走路歩きを楽しむことができた。種池山荘では美味しいCoffeeをゆっくり味わって、新越山荘までの2時間半ほどの歩きのため鋭気を養った。本日の行動時間は計画書上 11時間30分の行程であり、要所々々でのチェックポイントではやや先行したり、大きく遅れたり(最大50分)したが、最終的な新越山荘への到着は5分遅れで、誤差率は何と0.7%であった。我がAチームの健脚ぶりを如実に示すものであると思う。

7月27日[水] 4日目に新越山荘まで歩いて距離を稼いだことから 6:30 起床の計画であったが、5:00 からの朝食に間に合うようにそれぞれが起き出し、計画より2時間近く早立ちとなった。本日は5つのピークを制覇しなければならない。朝から小雨模様であり、本日も雨具を着けての出立となった。1つ目の鳴沢岳では雨も上がり遠望が利く。これまで歩いてきた、白馬岳、唐松岳、五龍岳、双耳峰の鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳が見通せる絶好のビューポイントである。「よくここまで歩いてきたな〜」とお互いの健闘を讃え、肩を叩き合う。

赤沢岳を軽く乗越え、スバリ岳に向かってガレた急坂を登っていたときのことである。WEさんの右足靴のソールが突然、半分くらいペロ〜と剥がれるアクシデントが発生した。このままではとても歩き続けられる状態ではない。念のため左足の靴も確認してみると3箇所が剥がれかかっており、こちらもこのままでは同様な状態になるのは時間の問題と思われた。ここで経験豊富な S.K 義さんがおもむろにリュックサックを下ろして、中の荷物を取り出し始めた。18kg ものリュックの中からはいろいろなものが出てくるが、ほとんどの荷物を取り出した後の底の方から“救急道具と補修キット”を収めたバッグが出てきた。中を開くと針金、ラジオペンチ、ガムテープ、結束バンド等、このような状況発生を想定した道具が現われ、これらを使って手際よく補修してしまった。まだ剥がれに至っていない左足の靴も同様に補修したことは言うまでもない。普通であれば「どうしようか?」とあたふたするところであったと思うが、慌てず騒がずロスタイム25分でこの難局を乗り切った技術力には感心させられた。もう1点、この状況下で感心したことを述べておこう。S.K 義さんの主な持ち物にはそれぞれに重さが表示してある。前述の救急&補修キットバッグには 780g と書かれてあった。ご本人の話によると、「行く場所や山行の内容、日程によって持っていくものが大きく変わる。どれとどれを携行するとリュックの重さがいくらになるか直ぐに分かるようにしている…」とのことである。日頃からの意識の高さを伺い知ることができるエピソードである。

赤沢岳からスバリ岳までは歩行時間で2時間ほど掛かる。さらに針ノ木岳まで1時間。この間は急坂あり、ガレ場あり、アップダウンありの歩き手のあるコースである。針ノ木岳は縦走最後の山と位置づけ、タスキを鉢巻にして、横断幕を取り出して最後の記念撮影を行なった。携帯のカメラでの撮影なので、画質が心配であるが…。

針ノ木岳山頂から針ノ木小屋までは45分ほどで降りてくることができる。早速、宿泊の手続きをして、昨日同様にこ

褒美のラーメン(¥1,000)をいただき、最後のピークである蓮華岳に向かう。山頂周辺はコマクサの宝庫であり、ところ狭しと咲き乱れていたが、白色のコマクサを見ることができるとのうわさがあり探したが、残念ながら見つけることはできなかった。また、既に時期を逸しているため可憐な花を見ることはできなかったチングルマも群生しており、ハイシーズンに訪れることができれば、それは見事な風情であることは間違いない。今回の山行を通して雷鳥の歓迎を6~7回は受けたと思うが、蓮華岳山頂周辺の往路と復路のそれぞれで雛鳥を4~5羽連れて2組の親子連れに出会うことができた。雷鳥(の少なくとも雄鳥)は低音のゲーツというような鳴き声であるが、雛鳥はひよこと同じような鳴き声でピョピョととても愛らしく、我々が側を通っても逃げるところかむしろ近づいてくるほどであった。日本人は雷鳥を大切にせず危害を加えない伝統が雷鳥のDNAとして受け継がれていることがよく分かった。

7月28日[木] 夜中の3時~4時頃に目を覚ますと、風の音がゴーゴーと唸り、激しい雨が窓ガラスを叩いており、「こんな状態で針ノ木大雪渓を無事に降りることができるのかな？」と不安になる。朝食後 Coffee を飲みながら、「慌てずにゆっくり様子を見て決断しよう」と話し合っていたら、雨脚は少しずつ弱まってきた。ほとんどの登山客は決断できずにグズグズと過ごしているようであったが、我々は7時過ぎに弱雨になったところで下山を開始することにした。初日の白馬大雪渓の雪も例年に比べて少な目であったが、針ノ木大雪渓の雪も少ないようで、針ノ木峠から当分の間は夏道をジグザグに下っていく。50分ほど歩いて大雪渓に取付きアイゼンを装着するが、25分も歩くと雪渓終点となった。この後、渡渉を7~8回繰り返したであろうか？雪解け水と昨晩からの豪雨で水嵩が増しているのであろうが、中には膝下まで水の中に入って渡らなければならない所もあり、靴の中は当然、グショグショになってしまった。下山途中や大沢小屋でこれから登る何組かのグループとすれ違ったが、心の中で「お気の毒さま」としか言いようがなく、我々も抜群の天候に恵まれたわけではなかったが、これらの方々に比べれば遥かに幸運であったと思わずにはいられなかった。

扇沢に11時前に到着し時間的にはかなり余裕がある。大町温泉郷 薬師の湯でゆっくり汗を流し、信濃大町駅で帰りの切符を購入してから、Mご夫妻に紹介していただいた“仁科そば”店で、ビールと日本酒と蕎麦を十分に堪能して、15:05分発あずさ26号で帰途の人となった。

今回の『TTC15周年記念 後立山連峰リレー登山』は7月22日~28日の間で実施された。曇りがちであったり、小雨模様であったり、霧で見通しが利かなかつたりと最高の天候とは言い難い状況ではあったが、思い返してみると、出発数日前には台風6号が日本の南海上をゆっくりと進み、各地に甚大な被害をもたらした。「実施日が前にずれていたら中止を余儀なくされたであろう」とホッと胸をなでおろしたのを鮮明に覚えている。一方、28日に予定通りの日程で帰宅すると、翌日からは新潟、福島を中心とした記録的な豪雨が河川の堤防を決壊させ、3月11日に発生した東日本大震災における津波にも匹敵する大きな流れとなって各地で被害を与えているとのニュースが流れており、長野県北部にも大量の雨をもたらしたに違いない。我々の下山があと1~2日後ろにずれていたら、今頃はこんなのにんびりとはしていられなかったかもしれない。全ての計画をほぼ予定通りに遂行することができたことを、TTCの皆さまはもとより、神さまに心より感謝申し上げたい心境である！

[参加メンバーからのコメント]

S.K 義さんのコメント 「TTC15周年記念後立山連峰リレー登山と深田久弥」

案の定、下山後の体重は厳密に1.5kg増えていた。調子の良かった証だ。白馬山荘からは、これから臨む針ノ木岳までの稜線がハッキリと見え、やる気を奮い立たせてくれた。後半の鳴沢岳からは遥か遠くに白馬岳、五竜岳、鹿島槍ヶ岳を望むことができ、この上ない達成感と幸福感に満たされたのは、最後まで一緒に歩いたCLのS.Tさん、救護のW.Eさんのお蔭だ。そして仕事の都合で1日早く下山したS.Kさんにも感謝したい。

今回のコースには百名山が3座もあるので、その著者に触れながら振り返りたい。言うまでも無く深田久弥は、山の品格、山の歴史、個性のある山、の3つの基準で百座選定を行った。昭和15年(1940年)「山小屋」3月号から“日本百名山”を連載したが10回20編で終了を余儀なくさせられ、昭和34年(1959年)「山と高原」に“日本百名山”を再開し、不撓不屈の努力により昭和39年(1964年)に単行本「日本百名山」を世に出した。その間、他の山域についても健筆を振るい続け、特にヒマラヤ研究においては第一人者であった。昭和31年(1956年)「ヒマラヤ登山史」、昭和37年(1962年)「シルク・ロード」、昭和39年(1964年)「ヒマラヤ高峰」などの大作が連なってそびえ立つ。“日本百名山”発刊を強く勧めた大森久雄は、深田久弥の全盛期のことを「日本百名山」の読売文学賞の賞金そのまま書店に渡ってしまった。」「裕福ではなくても心身ともに安定していた。」、と自著に記している。

さて、初日に到達した白馬岳は、3つの基準の中でも「山の歴史」に重点がおかれ選定されたのではないかと。明治26年(1893年)、陸地測量部が1等三角点を選点した時に石積み的小屋を造り、翌年、ウェストンが蓮華山方面から登り、あの大雪渓を降りている。明治38年(1905年)には山木貞逸(当時16歳)が山小屋ビジネス開業のため、石積み的小屋の譲り受けを申請し、その2年後、日本初の山小屋を開業した。我々が泊った「白馬山荘」だ。深田久弥は書の中で「南北の縦から望んでいる姿が好きである。…東側が鋭く切れ落ち、キッと頭を持ちあげた様は、怒れる獅子といった感じをいつも私は受ける。」と紹介しているが、私にはどう見ても三角定規を寝かした形にしか見えず、感

性の乏しさを痛感する。3日目の五竜岳は何と言っても「個性のある山」だ。「それはまるで岩のコブだらけの、筋骨隆々といった上体を現している。他の山々のように美しくスマートではない。ゴツゴツとした荒々しい男性的な力強さをそなえている。」と記している。また、後立山連峰の中心は、後立(ゴリュウ)が転じ五竜であると初期「山岳」の誌上で論議されたことも興味深い。深田久弥は1座を原稿用紙5枚 2,000字に制限した。その意味で4日目の鹿島槍ヶ岳は最も書き足りなかった山だったのではないかと私は感じている。「五竜岳の頂に立って、深い谷を距てたすぐ真向かいに、流れ行く薄雲の合間に隠見する吊り尾根を望んだ時だった。ああいう構図は、どんな天才的な画家も思いつくまい。」と品の良さ、品の高さを絶賛している。我々が五竜岳に着いた時は、残念ながらその美しい双耳峰を觀賞できる天候ではなかった。それにしても3座3様、3つの基準を楽しめたことは幸いだ。

私が深田久弥を私淑するようになった背景には、遠くから語る氏の言葉があった。「山の頂上だけは、そっと残しておきたい。山の名を心に刻んで登ってきた者に、なぜ頂上に山の名が必要だろう。」、乱立する山の道標や山頂の看板を嫌った。近年の安全登山の観点からすると論議が分かれると思うが、昭和50年代に比べると、今回のコース上の道標や看板は、かなりの確にスッキリとした感がある。以前は、うるさいくらいに「あと何分」の表示があったように記憶する。また、「私は山を飛脚的に登り降りするのを好まない。」とも言っている。観光や雑誌が煽って登る山ではなく、じっくりと山に向き合い、それでいて数多くの山に登った足跡は偉大だ。「百名山登頂」が今日の第2次登山ブームの牽引役となったが、私は無頓着で幾つ登ったのか、いまだに勘定をしていない。深田久弥の“山のこころ”だけに魅力を感じている片輪かも知れない。平成7年(1995年)、福井県丸岡町の福祉センターに建立された句碑には「城尊し／古き城／更に尊し久弥」と刻まれた。そこに重なる想いがある。

深田久弥が倒れた時に同行し、その後「百の頂に百の喜びあり」の石碑建立に精を出した山村正光さんとは、昭和60年(1985年)にモミソ沢を遡行した。その時にいただいた言葉「好い山、酔い酒、宵泊り」は宝にしている。今回のリレー登山では、師の言葉どおり「好い山、酔い酒、良い仲間」の存在を十二分に感じ取ることができた。各パーティーと合流する山小屋では、時間的に深く取り付く島はなかったが、お互いの労をねぎらうことができた。箱根駅伝並みのタスキの重さも感じた。ここまで綿密に計画・準備・実行された関係各位には、心より敬意を表し感謝したい。

【CLより一言】

ほとんどの工程において先頭を歩き、適切なルートファインディングと適切な歩行速度で、グループを常に快適にリードしていただきました。また、W.Eさんの靴底剥がれというトラブル発生時に、ごく自然に補修キットを取出して速やかに処置をおこなった行動には、技術力の高さはもとより日頃から色々なシーンを想定している意識の高さを伺い知ることができました。よって、**『最優秀技術賞』**を授与致します。

W.Eさんのコメント

夜行バスで行きましたけどぜんぜん眠れず、大雪渓を登るのにたいへんで、ザックの重みも肩に食い込み大変でした。初めての不帰嶮、私は岩場が大好きなのでルンルン、高い処が好きです。唐松岳、五竜岳での会のグループの歓迎は嬉しかったです。リレー登山の醍醐味を感じました。失敗したことは、靴をチェックして居なかったのか、ソールがはがれ、仲間の方に迷惑を掛けてしまいました。長いコースでしたけど、楽しい縦走ができました。

【CLより一言】

全山縦走の本隊コースに紅一点で参加いただき、キメ細やかな心配りで、厳しいコースを登っている際にもいつもホッカリとしたムードを醸し出してグループを温かくしていただきました。花の名前に明るく、名前を覚える気がほとんどない他のメンバーが何度も同じ質問を繰り返しても、いつも優しく教えていただきました。また、約11kgもの荷物を背負って、不帰嶮～八峰キレット～針ノ木岳までを難なく踏破された頑張りには目を見張るものがありました。よって、**『最優秀頑張ったで賞』**を授与致します。

S.K.さんのコメント

CLには、TTC15周年記念後立山リレー登山の総監督の立場で重圧もあったことと思いますが、無事終了してお疲れさまでした。7月23日(土曜日)から28日(木曜日)までの5泊6日の長丁場をAチームのCLとして遂行され、無事終了し、大変お疲れ様でした。私自身はCLと同じAチームに参加しましたが、仕事の都合で、27日(水)、28日(木)の2日間を同行できず残念でなりませんでした。私を除くAチームの3名の方々は、計画をすべて達成され、おめでとうございます。Aチームは、足が揃っていましたが、経験豊かなWEさん、SK義さんや責任感が強いが時々つまらない洒落を言うCL(笑)と同行できて、大変楽しいひと時を過ごさせていただき、ありがとうございました。

また、26日(火)、27日(水)の両日にお世話になりましたCLのM.Y.さんを始めEチームの皆さんにはお世話になりました。鹿島槍ヶ岳や爺ヶ岳では巻き道を通らずに中岳、南岳の山頂と一緒に踏むことができました、ありがとうございました。EチームではAチームが爺ヶ岳の中岳と南岳の山頂を踏まず、巻き道を行ったのではと噂していましたが真相はどうでしょうか？今回の山行で特に印象に残ったことを下記に箇条書きにします。

1. 岩の上に華麗に咲く、岩桔梗にはかなり素晴らしく絵になっていた。
2. 雷鳥を白馬岳を始め3回見ることができた。

3. 白馬岳の山頂でブロッケン現象を見ることができた。
4. 杓子岳の山頂を踏んだ。
5. かわいいオコジョを初めてみることもできた。
6. 岩ヒバリを至近距離(約2m)で見ることができた。
7. コマクサを始め多くの高山植物を見ることができた。
8. 昨年に走破した大キレット(槍ヶ岳～穂高岳)、今回の不帰キレット(白馬岳～唐松岳)、八峰キレット(五龍岳～鹿島槍ヶ岳)で、日本三大キレットを走破できた。
9. 北アルプスの山小屋は、綺麗だし食事も良かった。
10. 扇沢の下山口でタクシーの運転手さんに写真を撮っていただいた時には、やった！！と思うのと反面、針ノ木岳に行きたかったとの思いが同時にあり複雑だった。
11. 薬師の湯は最高に良かった。(4日間お風呂に入っていなかったのも…。)
12. 27日(水)に食べた大盛り蕎麦とてんぷらは、本当においしかった。

[CL より一言]

全コースのうち4日間をAチームとして参加され、この間、ユーモアあふれるギャグの連発で、常にメンバーを和ませてくれました。Eチームに移行後の残りの2日間が寂しかったこと！よって、『**最優秀ユーモア賞**』を授与致します。この状況をヒヤリ・ハットメモのフォーマット風にまとめると、[発生状況:不帰嶮等の緊張のシーンにおいてギャグを連発し、他のメンバーが思わずズリ落ちそうになった]、[原因:ギャグのレベルが低俗]、[対策:センスを磨いてギャグのレベルを格段に向上していただく]ということになるでしょうか？(笑)

—— 以上 ——